

～時代はみずがめ座?～

占星術など占いには不思議な魔力がある。大半は過去の循環論だと思うが、グルグル回る地球にいるせいか、過去のパターンが繰り返されると思い込みがちだ。うっかりしがちな人間には過去の言い伝えの方が戒めになると思うが、希望の火も灯し、偶に当たる占いの方が気分が良い。

代表的な景気循環論に「太陽黒点説」がある。太陽黒点のサイクリカルな増減で地球環境や人間心理が変わり、農業生産などに影響すると見ることに由来する（最近では太陽黒点サイクルの乱れや極小氷期説＝黒点が無くなり寒冷化する。14世紀半ばから19世紀半ばまで断続的に続いた。等々からあまり取り上げられていない）。大雑把に10～12年周期説。教科書の在庫、設備、建設の各循環のうち設備循環に該当する。古代からの“十干十二支”とも重なる。株式市場の相場格言「子繁盛、丑躓き、寅千里を走り、卯跳ねる、辰巳天井、午尻下がり、羊辛抱、申酉騒ぐ、戌笑う、亥固まる」は、意外と景気循環論に基づく。経済拡大が続けば、「戌亥の借金、辰巳に返せ」が可能だ。

まだ2ヵ月弱を残すが、2020年は「庚子（かのえね）」の年。子年の1950年以降の株式市場の成績は3勝2敗、平均上昇率は23.9%、辰年の27.5%に次ぐが、今年は“繁盛”したものが商売でなく感染症で、どの程度で着地するか未だ混沌としている。十干で最悪成績の「庚」（2勝5敗で平均-4.2%）の色合いが出ている可能性も考えられる。

2021年は「辛丑（かのとうし）」年。丑年は同じく3勝2敗ながら、平均パフォーマンスは-0.8%と、午年の-4.5%に次いで良くない（寅年が+3.2%と下から3番目を除くと、格言はまあまあ当たっている）。「辛」は4勝3敗、平均+9.2%で7番目の成績。格言通り、何か大きな事に躓くのか、小さいものに繰り返し躓くのか、あまり良い予想にない。ツメを伸ばしたくない小刻み展開のイメージだ。

ロシアの占星術師タチアナ・ボルシュ氏が20年7月のインタビューで「2020年は6回の日食があり、多くの惑星が逆行し、困難な年になる。それは2021年も続く」と述べている。占星術のことはサッパリ解らないが、「今秋冬も厳しい時期になり、不安定化が進む。世界中の多くの国で、病気の発生、デモ、革命的な感情と共にショックが続くでしょう。以前は安定していたように見えた全てのものが、もはや安定していないと言う異常な時代に生きています」と続けた。占いは当たるかどうかより、気分フィットするかどうかだ。

抽象的な話になるが、タチアナさんの預言として「20年12月25日、みずがめ座への移行の時代が始まる」。「新しい時代には常に世界的な衝撃や文明の危機、経済的および文化

の革命、そして宗教的概念に対する新しい見方が生じます」。何のこっちゃ、習近平主席が“文革”でも始めるんかいなあ、と思ったが、解説記事によると、「（現在の）うお座の時代が男性性の時代で、女性性の時代に移行する」そうだ。単純に女性が活躍、支配すると言う意味ではなく、行動や習慣パターンを意味するそうだ。星占いで、みずがめ座は平等、利他的な愛、マイペースなどと言われる。何となくそういったイメージなのだろう。

解説では「うお座の反対になる」。いつからうお座なのだろうと思ったら、AD1 年から。2000 年以上も、うお座だったら、それ以前との比較はない。2000 年単位と言う当に歴史的転換が起こると言う訳だ。うお座の象徴的な概念は三つ。「お金がないと生きられない」、「法律がないと社会は成り立たない」、「政府や支配者がいないと世は成り立たない」。これらの逆転現象が起こると言う。紀元前は一部を除いて、お金も法律も政府も無かったと思えば、妙に納得する。

みずがめ座の時代も 2160 年間続くそうだ。変化は少しずつか、あるいは時々の激変か、一時的には逆転現象が起こるのか、パターンは不明。例えば「お金」はどう変わるのだろうか？一瞬、キャッシュレス時代の到来を意味するのかもしれないが、そうではなさそうだ。コロナ禍で大量に供給された資金で、貨幣経済に何等かの歪み、変質化が起こってくるのではないか、と言った問題意識を持ちたいと思う。米大統領選の大混乱や中国共産党の治世を見ていると、「法律」も「政府」も既に歪み始めている印象を受ける。

タチアナさんは米大統領選についての質問に対し、「占星術的にはバイデンの星はトランプの星よりも弱く、バイデンとだけ対戦している限りはトランプ再選の可能性が高いと思います」。「この選挙では多くの信頼できない情報、または意図的に捻じれた情報、そして大規模な抗議が予想されることを星の動きが示している」。トランプはバイデン以外にも戦っているようだ。混乱のピークは大統領選の前週から翌月全体としている。現状を見ると、強ち的外れではない。

今を時めく PCR 検査を発明し、ノーベル賞を受賞したキャリー・マリス博士が著作で占星術を解説しているそうだ。「科学は、占星術を非科学的なものと断定して嘲笑しているけれど、古代の著名な文明の多くが、ほぼ占星術により運営されていた事実に向ける態度は奇妙だ」。博士とは関係ないが、古代文明例として、古代インドの宗教文書「ヴェーダ」に、みずがめ座への移行の時代に言及があり、“暗黒の時代”（人は邪悪に変わり、世界は病気と嗜眠と怒りに満ち、自然災害と苦悩と恐怖が支配的な世界となる。宗教的な儀式は廃止され、すべてのものに変化が反映される）としているそうだ。ウーン、覚悟があるな。念のため繰り返すが、私は占いや占星術に傾倒している訳でもなく、詳しい訳でもない。来週や今月の運勢を覗き見る程度。みずがめ座でもなく、普通のいて座である。以上

<筆者 一尾仁司>

1976年大阪大学経済学部卒。山一証券で一貫して調査畑を歩み山一証券経済研究所大阪所長、その後、外資系及び国内証券会社日本株ストラテジストを経て、FISCO 客員ストラテジストを歴任。ミクロ分析の経験をベースに、政治・経済、海外情勢など幅広い視点からの分析を得意とする。雑誌の執筆等多数。社団法人日本証券アナリスト協会検定会員。

日本橋は、古くは東海道の出発点でもあります。“日本橋”が架けられたのは慶長八年（1603）。翌年日本各地につながる五街道の起点として定められた歴史です。「日本橋多事彩論」— 独自の視点で金融市場を始め、政治・経済・社会の幅広いジャンルからその時々のテーマを論じていただきます。友情支援的な執筆であり、オフィス所在地とも絡めた「日本橋」発の“一尾レポート”をご一読いただけますと幸いです。

(株式会社 スギチェードロ)